レッシング「ミンナ・フォン・バルンヘルム」への評価

吉田次郎

もう四十年にも近い昔のこと、かつてメーリングの「レッシング伝説」(Franz Mehring, Die Lessing-Legende. 1893) を読んだとき、その手堅い、筋の通った論証に感心させられたが、とりわけ喜劇 "Minna von Barnhelm" (一七六七年発表) の構想を、フリードリヒ二世統治にたいする辛辣な諷刺、おそろしい嘲笑であると断じているのをみて、意外な感じとともに、見えぬ眼を開かれたような思いをしたことをおぼえている。というのも、このドラマの軸である主人公テルハイム少佐の、おのが名誉毀損への恨みと悩みは、フリードリヒ王の裁きによって解決されたかのように、そこで劇そのもののもつれも解決されたかのように見え、したがってこれは大王をたたえる劇作品であるというのが、それまでの文学史家などのふつうの見解であったからだ。そしてわたくしもその影響をまぬがれえなかったからだ。しかしメーリングの所論は、しっかりした関係文献の博捜、とくにフリードリヒの勅令 (Kabinettsordre) の精査の上に拠って立っているだけに、説得力があった。

このたび新しい全集版[1]で再読して、昔のこの印象はたしかめられたが、同時にあの戯曲も読みなおしてみると、メーリングの所論は主として外的証拠によっているのに対し、作品そのものが彼の論旨の味方をしているのではないかという考えを持つにいたった。つまり、専制政治下の出版ということへの配慮もあって、レッシングは非常に巧妙にこの喜劇を構成しているので、作品みづからが讃美なのか、嘲笑なのか、人をまどわせる顔付をしているのではないか、という考えである。

さてメーリングのこの本は、レッシングにまとわる伝説の破壊を意図したものである。この伝説は著者によれば、「詩と真実」第七章の「有名なくだり」にその芽生えがある。つまりゲーテはこの章で、そのライプチヒ遊学の頃のドイツ文学について書いているのだが、有名なくだりとは、プロイセン王フリードリヒ二世と七年戦争（一七五六―六三）に触れているところである。要約すれば、この大王と七年戦争の事績を通じて、ドイツの文芸のなかへ、最初の真実な、高度の生活内容が入りこんできた、文芸にふさわしいそのような内容は王者から、上からやってくるのである、ということ。プロイセンの作家たちは王を渇仰しつつ精進してきたが、こちらは彼らには一顧も払わなかったので、作家たちはせめて王から注目されようと全力をつくした、ということ。レッシングの「ミンナ・フォン・バルンヘルム」は七年戦争の最も真実なる所産で、とくべつアクチュアルな内容を持つとともに、文芸がそれまで動いていた文学的・市民的世界からより高度な、より重要な世界へ眺望をひらいた劇作品である、ということ、その他。

ところでプロイセン支配体制に追従する文学史家たちがゲーテという権威のこれらの発言によりかかって、あたかもフリードリヒ二世はドイツ古典文学を鼓舞した守り神であったとか、レッシングもザクセン出身ながらベ

ルリンで文筆活動をやったからその才能がのばせたとか、彼もまた王に注目されたがった一人であったとか、とりわけ彼は喜劇「ミンナ」によって大王をたたえたのであるとか、そういう伝説が次第に形成されてきて、遂にベルリン大学の文学史教授ヴィルヘルム・シェーラー（Wilhelm Scherer）と、その後継者エーリヒ・シュミット（Erich Schmidt）においてその頂点に達した。そのようにメーリングは見て、この伝説の萌芽となったゲーテのあの「有名なくだり」の意味するところをはっきりさせるために、彼の言葉を借りると、「その百倍のスペースを費した」のである。

つまりゲーテからのあのくだりの引用は二頁にわたっているが、メーリングはプロイセン国家とフリードリヒ統治の本質を明らかにするために約二百頁を費しているのである。そして、プロイセンがその経済的特殊性によって陸軍国（Militärstaat）として発展してきたこと、七年戦争はいわゆる国民戦争ではなくて、王の行なう閣令戦争（Kabinettskrieg）であり、傭兵戦争（Söldnerkrieg）であって、市民階級や農民階級は自発的な参与から除外されていたこと、その他、フリードリヒ体制の外交、行政、司法、宗教・教育政策などを詳しく検討して、けっきょくこの体制は、例えばドイツ古典文学のような文化現象とは明白に敵対していたという結論に達したのである。

そこでプロイセンによって代表されるような多かれ少かれ封建的で軍事的な小国群のあいだで生活せねばならなかったレッシングの著作、その戯曲や批評や論争などをとらわれぬ頭をもって読むなら、それらが市民的意識または自覚に徹底的に貫かれている仕事であり、彼は当時の無気力なドイツ市民階級のなかにあって最も先進的な文学者であったという評価が自然に出てこよう。彼は一作毎にドイツの文学にとって新しいジャンルを呈示す

べく、市民悲劇「ミス・サラ・サンプソン」を書いたあとで、こんどは市民喜劇「ミンナ・フォン・バルンヘルム」を創作した。しかし主人公は貴族の軍人であり、また人物たちも軍人が主であるのはどういうわけか。その答えはこうだ。

「それはまことにみじめな時代で、傭兵の軍隊は当然ながら評判はわるかったが、それでも軍人階級は、少なくとも戦時には、個人的な自主性とりっぱさが繰りひろげられえた唯一の階層であるという次第であった。……だからレッシングは進んで軍人の仲間と交わったのであり、その劇作品で好んで軍人的な性格を描いたのである。そしてまた、ライプチヒやベルリンの味気ない俗物的生活に彼の熱烈な精神が吐き気をもよおして、プロイセンの将軍タウエンツィエンの秘書となってブレスラウの陣営へ逃げていったのである。」そしてこの地での戦陣の生活雰囲気のなかからこの喜劇は生まれたのであったが、しかも作者はあくまで市民的な人間であることをやめなかった。「みじめな時代のせいで、おのれの市民喜劇を軍人の劇として書くことを余儀なくされたが、その喜劇に軍人的な精神でなく、たいそう市民的な精神のいぶきを吹き込んだ。それは王侯の専制政治に向って、歯をくいしばってもおのが権利と正義心を固守して屈しないという精神であった。[2]」

このように見るメーリングにとって、例えばシェーラーの「ミンナ」にたいする次のような評価は全くの的はづれであるばかりか、度しがたいへつらいと映ろう。「ドイツ婦人にたいする敬意。レッシングがそのなかで四年間暮した軍の讃美。背後にそびえ立っていて正義を行使する大王への祝典。それはテルハイム少佐に失われた自尊心をとりもどし、汚された名誉を回復してやって、すべてをめでたく終らせるところの正義なのだ。[3]」

さてメーリングの批判の向けられる急所は、王の行使するという正義、すべてをめでたく終らせるというその

正義とは何か、というところにある。劇中にはむろん王その人は登場しないが、その「正義の裁き」は第五幕第九場で、テルハイム少佐へ宛てた親書となって実現する。そこでここに来るまでのいきさつを述べねばならぬ。

この戯曲は五幕から成っているが、はじめの二幕はいわゆる劇の提示部で、第一幕はテルハイム少佐と従卒のユスト、のちに部下のパウル・ウェルナー曹長。第二幕はミンナとその侍女フランツィスカの登場、そしてこの両グループが投宿する宿の亭主が双方の仲だち役を演ずるという仕組み。ゲーテがドラマの提示部の傑作だとほめたところである。[4] 第二幕の終りにすでに始まっていた両方の交渉が第三幕に入って、いよいよ劇の本筋となって進展してゆく。すでに婚約の指輪をとり交わした二人であるが、ザクセンの令嬢ミンナはテルハイム少佐を追ってわざわざベルリンまでやってきて結婚することを求めるのに、他国の軍人ながらプロイセンに仕官して、七年戦争が終るとともに退役となった少佐はどうしても承知しない。深く愛しあっていることは互いによく知っているのに。拒絶の理由は、男女の結びつきは互いに平等の者でなくてはならぬのに、自分は退役させられ、かつ名誉を傷つけられたテルハイム、不具者で乞食のテルハイムであるから、あなたには値いしないというのである。そしてミンナのひきとめる手をふりきって去ってしまう。

読者または観者には彼が退役になったばかりの士官であること、負傷した腕が不自由であること、婚約の指輪を宿の亭主のところに質入れするくらいだから金に困っているだろうこと、それは理解できるが、名誉を傷つけられたということの具体的な内容がまださっぱりわからない。しかしそれが彼の怒り、憂鬱、恨み、かたくなさのいちばん強い原因で、拒絶の他の理由はつけたりのようだと推察はされる。それは、彼が事情を書いて送った手紙をミンナは読んだらしいのに、彼にはまだ読んでないようにみせかけるので、われわれには事実内容がわか

らないという風に仕組まれているからだ。そこで第四幕の第六場で、彼女は少佐を問いつめ、はじめて名誉毀損の事実が明らかにされる。

テルハイム　わたしの手紙を読んでいて下さったらなあ、お嬢さん。

ミンナ　読みましたよ。でもそこのところがまるで謎みたいなの。あなたのけだかいおこないが犯罪だなんて、どうしてそんなことが言えるのでしょう。説明して下さいな。

テルハイム　おぼえておられるでしょう、わたしは、あなたの県の役所から軍税を現金で容赦なく取りたてるよう指令を受けていました。が、わたくしはそれほど厳重にしたくなかった、そこで不足の金額を自分のふところから立て替えをしましたねえ。

ミンナ　おぼえていますとも。――ですからこそ、あなたにお会いせぬさきから、あなたというお方が好きになったのですわ。

テルハイム　県会は手形をわたしに出しました。で、平和条約が調印されると、わたしはこの手形を認可されてしかるべき負債のなかへ登録させようとしました。手形は有効だとみとめられたのですが、わたしに所有権ありや疑わしいとされたのです。手形の額面を現金で払ったのだと証言しても、あざ笑うように口をゆがめます。手形を県会の贈賄、進物だというのです、つまり、どうしてもやむを得ぬ場合には、それで納得するという全権をわたしが托されていましたその最低額で、早速にも県会と手を打ったからだというわけです。そこで手形はわたしの手から離れたのですが、もし支払われても、わたしに対してでないことは確かです。――そういうわけで、わたしは名誉を傷つけられたと考えるのです。退役のせいではありません、もし免官でなか

ったら、こちらから求めたことでしょう。――むつかしい顔をしておいでですね、なぜ笑わないのですか。ハ、ハ、ハ。笑いますとも、わたしは。

そしてミンナの懸命な説得にもかかわらず、少佐が自分を中傷した者たちの前でのたれ死にしてやるとまで言い張るので、彼女は侍女としめし合わせておいた策略を使うことにする。というのは、少佐と二人だけになったとき、フランツィスカは彼に、実はお嬢様は後見人である伯父の伯爵の反対を押しきって、少佐殿を追って逃げてきたのです、そのため伯爵はお嬢様の相続権を取り消されましたと嘘をつくのである。するとたちまち局面は逆転して、少佐が自分を愛したがために不幸を招いた女を守り抜こうと決意するところで第四幕は終わる。

第五幕に入ってもミンナのその戯れはつづき、テルハイムが救いの、保護の手をさしのべても、こんどは彼女の方がその手をなかなか取ろうとしない。そこへ一人の警備兵が王の親書をとどけに来る。テルハイムはそれを読んで驚喜の声を上げる。ここでも大王たるの実を示された、なんという正しさ、なんというお恵み。わたしの幸福、わたしの名誉、すべてが回復された、と言って、ミンナにもぜひ読めと求める。彼女は書簡を受けとって、声を出して読む。

「親愛なるフォン・テルハイム少佐へ

貴君の名誉に関して余を憂慮せしめていた事件は、貴君に有利に解決したことを通告する。舎弟はこの件には詳しく通じており、その証言は貴君が無実以上であることを明らかにした。宮廷金庫は貴君にかの手形を返却して、貴君のなしたる立替金を支払うべき旨の命令を受けている。余はまた、戦時金庫が貴君の請求書にたいして申し立てておる反証はすべて却下さるべしと命じた。貴君の健康は再び軍務につくことをゆるすや否や、

申し出られよ。貴君のごとき心意と勇気を有する男子を麾下にもたぬことは余の好まざるところである。貴君に好意的なる王より、云々。」

これでテルハイムのかたくなな心もとけ、名誉を回復されてしあわせに輝く愛人を見て、ミンナもともに喜び、彼女は事の真相をあかして、二人は心からめでたく結ばれる、とそんな風に先づ誰もが期待するであろうが、しかし事はそう簡単にはすすまないのだ。ここから終幕までの約十頁をよく注意して読む必要があると思うが、それは後に試みることにして、ここでは先に触れておいたメーリングの批判を見てみよう。

彼はフリードリヒ二世の、士官たちにたいする専制君主に特有の気まぐれで意地のわるい処遇だとか、占領地にたいする仮借なき戦時課税とかを実例を挙げて指摘してから、「ところでいったいブルジョア文学史家たちは〝ミンナ〟のプロットを理解したであろうか。……それはまさにフリードリヒ王の統治にたいする辛辣な諷刺にほかならぬのである。」[5] そして既に述べたところであるがメーリングは、テルハイムの免官、ザクセンにおける軍税の取り立て、その一部の立替えと県会の手形振出し、そして終戦とともにその手形を認可さるべき負債に登録しようと申請すると、それは県会からの贈賄であると中傷されたことを述べ、次にフリードリヒ王の親書の内容を再述してから、「レッシングはこのあたりさわりのない牧歌によって、フリードリヒ統治の実際にたいし、この上もなくおそろしい嘲笑を放ったのである。〈認可さるべき負債〉、ところが、フリードリヒ自身が過少に計算しているのだが、彼は七年間にザクセンから五千万ターレルを搾りとったのに、そのうちむろん一文も〈認可〉されることはなかったのである。〈(テルハイムの)なしたる立替金〉の宮廷金庫からの支払い、しかしフリードリヒは戦災による損害賠償の請願はすべて、請願者はノアの洪水以来の損害を早いところつぐなってもらいた

いのかなというあの周知の、判で押したような言いまわしで却下するのが常であったのである。最後に、免職の士官に、また軍へもどってこいと王が自発的にうながすとは！……」[6]

このように王の親書の内容が全くのありそうもない作り話であるのなら、もしそれが Deus ex machina のはたらきをして、それで万事が解決される喜劇だということになると、この喜劇そのものがありそうもない作り話となってしまわないだろうか。レッシングがそのようなものを書くはずはない。

ところで大王讃美ととりたがる文学史家たちは、むろん勝ちほこって親書の出現を特筆大書するが、ではなぜそれだけでは足りず、終りにあのミンナの伯父の伯爵が宿に着いて、二人を最後的に結び合わせる役目を演ずるのだろう。なぜ親書の内容が披露されてからもドラマはなかなか終らず、主人公たちのやりとりが続くのであろう。だからエーリヒ・シュミットさえもこのように問うている、「事のなりゆきからして、葛藤が全く内面的に、そして残りなく解決されることはありえない。だがわれわれは疑問に思う、なぜミンナは彼女の幸福を決めた王の親書をかくも冷たく受けとめ、それからもまだ数場面のあいだ、例の策略をうちあける代りに、その演技をつづけるのか、と。」[7] そして親書が到来して以後のこの終りの数場面は、わざとらしいとか、小細工をしすぎるとかの非難が集るところなのである。そこでわれわれも、ここをよく気をつけて読んでゆくことにしよう。

王の親書をミンナが読みおえると、すぐ、

テルハイム　で、これにはどう言われますか、お嬢さん。

ミンナ（書簡を又たたんで、返す）わたくし？　なんにも。

テルハイム　なんにも？

ミンナ　いえ、これだけ。えらいお方であられるあなたの王様は、よいお方でもあるらしい、と。でも、あたくしには、どうということもないわ。あたくしの王様ではないのですもの。

テルハイム　ほかには何も？　このわたしに関しては？

ミンナ　また軍務につかれるのでしょう。少佐殿は中佐殿に、たぶん大佐殿になられましょう。心からお祝いしますわ。

テルハイムが退役したことを知らず、侍女の言葉を借りると、彼を王から「略奪」するつもりでベルリンに来たミンナには、あの書簡を読んでいちばん気がかりだったのは、この軍務にテルハイムがもどるかもしれぬという一点にあったことがわかる。そこで次に続く長いせりふで、テルハイムはこのように告白する。分別ある男を満足させるに足るだけのものが幸いにもかえってきたのだから、今はミンナより他の誰に仕えるかは、ミンナの意向ひとつにかかっている。自分としては全生涯を彼女に捧げたい。王侯に仕えることは危険で、その勤務に要求される労役、強制、屈辱に値いしない。わたしが軍人になったのは、この地位でしばらく自分をためしてみ、危険と呼ばれる一切のものと親しんで、冷やかさとか果断とかを学ぶのは、すべての正直な男性にとってよいことであろうという気まぐれからだ。職業とする気はない。もう強制するものは何もないから、わたしの唯ひとつの野心は、おちついて満ち足りた人間になることだけだ。ミンナと一緒なら、きっとそうなろう。明日は二人は結ばれ、それから広い世界の中に、そこが楽園となるにはしあわせな二人だけが足りないというこの上なく静かな、明るい、うららかな片隅を探すことにしよう。

するとテルハイムは、そわそわとあちこちへ振り向いて、感動をかくそうとつとめているミンナに気がついて、

どうしたのかと問う。彼女は気をとりなおして、あなたは残酷だ、あたくしが断念しなくてはならぬ幸福をそれほど魅惑的なものに描いてみせるとは。あたくしは失ったのです……（テルハイム）何を失ったというのです、ミンナが何を失なおうと、失われたのはミンナではない。今もやっぱりこの世でいちばん愛らしい、いとしい、いちばんよい人なのだ。

今や熱烈な恋人となったテルハイムは彼女の手をとって口づけしようとするが、彼女は手をひっこめて、いけません、なぜ急にそんなに変ったのです。あの冷たかったテルハイムは、愛の対象を軽蔑にさらして平気なようなのはくだらない愛情だと言うほど分別がありました。名誉が彼を呼んでいる今、大王が彼を招請している今、彼があたくしと一緒に恋の夢想にふけるのをゆるしてよいものでしょうか。少佐殿、よりよい運命の手招きにしたがって下さい。

それならそれでも結構。貴人の世界の方にあなたが心ひかれるのなら、ミンナよ、よろしい、そこにわれわれを預けよう。――しかし貴人の世界というのはなんとちっぽけで、なんとみすぼらしいことか。あなたにもいずれそのことが……

するとミンナは、彼女も相手をテルハイムと呼んで、あなたは誤解している、あなたにはその貴人の世界へ、名誉の道へ帰ってもらいたいが、あたしはついて行こうとは思わない。あそこでは、あなたには咎のない奥様が要るので、あたくしのような家出をしたザクセン女なぞ……

このようにミンナはあい変らず虚構の理由でテルハイムの求愛をしりぞけて、とうとう「不幸なバルンヘルムは幸福なテルハイムの妻になってはならぬ」ときっぱり宣言する。

それはわたしへの死刑の宣告ですか、とおそらく沈痛な口調で問うテルハイムに、彼女は答えをかわして、平等だけが愛情のかたい紐帯なのです。――幸福なバルンヘルムは幸福なテルハイムのためにだけ生きたいと願いました。不幸なバルンヘルムもまた、自分を通じて彼女の友の不幸を増すにせよ、やわらげるにせよ、ともかくそうするように遂には説得されたでしょう。――二人のあいだの平等をすっかりまた廃してしまったあの親書が来るまえには、あたくしがなおも拒絶していたのは見せかけにすぎないことに、あなたは気づいていたのではありませんか。

このあたりは、かつて不幸であったテルハイムが幸福であったミンナの求愛を拒絶するのに用いたせりふを、今は「不幸な」ミンナが幸福なテルハイムにたいして、そっくりそのまま逆用しているところが何度も出てきて、それらの言葉はテルハイムの心に突き刺さって彼を悲しませるが、他方、読者または観者にはそれが彼女の演技だとわかるから、ひそかな笑いを誘うという効果が狙われている。さらに二人にとってのあの王の書簡の価値が、テルハイムが「王侯に仕えるのは危険だ」と述懐したあたりから除々に相対化されてきたが、第九場もやがて終ろうとするこの地点で危うく無価値になりかけるのである。すなわち、上述のミンナのせりふに、テルハイムのせりふと所作が次のようにつづく。

テルハイム　それは本当ですか、お嬢さん。――ありがとう、ミンナ、死刑の宣告はまだ下されなかった。――不幸なテルハイムだけが欲しいのですね。あげますとも。（冷やかに）今こそわたしは感じている、この遅くやってきた正義をお受けするのは、わたしとしては正直でない（unanständig）と。（傍点筆者）あれほど無礼な嫌疑で辱しめられたものを回復してほしいなどと決して求めない方がよいのではないか、と。――そう

だ、この手紙は、もらわなかったことにしよう。こうやって、この手紙に答えてやろう。（王の親書を引き裂こうとする。）

ミンナはその手をおさえて、どうしようというのです、となじると、あなたを所有したいのだ、もしお考えを変えないのなら、手紙はまちがいなく引き裂きます、――その上で、あなたがまだわたしにどんな異議をとなえるのか、見たいものです、とテルハイムがやや脅かすような調子で言うと、勝気のミンナは、なんですって、そんな調子でものを言うの。それでは、自分が自分の眼に軽蔑に値いする女に見えなくてはならないの。男性の盲目的な愛情のおかげで幸福になるなど、くだらない女ですね、とここでもテルハイムがミンナにかつて言ったと同じ言葉を逆用すると、テルハイムは、それは全くまちがっている、自然は男性と女性のどちらを異性の支えになるように定めたのか、女性の守護者であることとそ男性にふさわしいのだとほのめかすと、ミンナはかつてのテルハイムのように相い変らずかたくなに、あたくしを守ってくれるものがないわけではない、わが国の大使に援助を願ったところ、今日にも会談したいということだから、世話してくれるかも知れない。急ぐからこれで失礼します、と出て行こうとすると、テルハイムはどこまでもあなたについて行って、あなたがどんな残酷なわがままから、二人を結ぶ紐帯をたち切ろうとしているかを、会う人ごとに話してやります、としつこくからんでいると、従卒のユストがえらい勢いで駈けこんできて、第十場へ移るのである。

この第九場は第五幕でいちばん長く、そしてこの幕の力点もここに存在しているのである。ところがそれから第十五場まで、短かい各場面があわただしく交替して、いわゆる喜劇的解決でドラマも終るという次第なのである。その経過を簡単にたどってみると、――

ユストが少佐に、宿の亭主から、質に入れたあの指輪をお嬢様がそれを自分のものだと知って、取りあげて、返してくれないのだと聞きましたと告げるのを、ミンナがそれは本当ですと肯定すると、テルハイムは急に興奮して、あなたはわたしとの仲を絶つのが目的でここに来たのだ、今こそはっきりした、あなたがいつわりの、不実な女だということが、と罵る。（実は第四幕六場で、ミンナはこの指輪を、あたかもテルハイムから受けた婚約の指輪のように見せかけて、二人の関係を絶つしるしだとして少佐に返していたのである。だから少佐は、彼女が自分のを取りもどし、彼のを本人に返したのだと誤解したわけだ。二人が取りかわした婚約の指輪が酷似していることを利用して、ミンナにたくませた小道具による遊びである。）彼女は仰天して、自分の仕組んだ戯れがやり過ぎだったとさとる。そこへウェルナーが少佐からたのまれた大金、ミンナの窮境を救うための金をもって登場するが、局面がこう変っては少佐は金には目もくれない。ウェルナーは機嫌を損じて金の袋を少佐の足もとに投げ出し、少佐も大立腹で爪をかんでいる。ミンナは彼に、誤解だ、間違いだ、どうか言うことを聞いて下さいと切願するが、こちらは顔をむけて、何も耳に入らぬ。そうしたところに二人の侍僕があらわれて、ミンナに伯父の伯爵の到着を告げる。彼女が伯父さんだと声を上げると、急に我に帰ったテルハイムはむろんまた誤解して、こわがらなくてもよい、わたしが伯父さんと対決するからと慰めにかかる。ミンナはしかし一刻も早く真相をと、自分の家出、伯父の不興、相続権の剥奪とはすべて作り話だとうちあけると、作り話だと？　しかし指輪のことは？とテルハイムが問いかえすのに、あなたがいま手にしている指輪をよく御覧なさい、それこそわたくしがあなたに差し上げたのじゃありませんか、と注意されて、なるほどとおどろくと、彼女はその指輪を彼の手から奪い取って、みずからそれを彼の指にさしてやって、これでなにもかもきちんとなったでしょう、とおそ

らく半ばからかうような口調で言う。テルハイムは、意地のわるい天使、たいした俳優さんなどと呼び、おそろしい夢から急にさめたみたいで、まだ正気にもどれない、などとぶつぶつ呟いていると、伯爵が侍僕らや亭主に伴われて部屋に入ってくる。伯爵はテルハイムを初めて見るのだが、一目で彼だと知る。そして気に入る。「わしはこの色の（とテルハイムの制服を指して）士官をふつうは好かんのだが、しかしあなたは正直なお人だ。そして正直な人というものは、どんな服装をしていようと、好きになるものなんだ。」そしてその後のくわしい話を聞こうと、令嬢を連れ、テルハイムも招いて、自分の部屋へ行く。しかし少佐は一言だけウェルナーに話があるとミンナにことわって、のこる。それからまだ不機嫌でむっつりしているウェルナーに近づき、例の金は喜んで受けとると告げ、自分の腹立ちから彼を怒らせたことを詫びて、喜ばせる。そしてフランツィスカにも言葉をかけ、意味ありげに彼女を見つめてから退場。すると彼女はおづおづと、恥づかしそうに近よって、「曹長殿――あの、曹長夫人は要りませんか。」びっくりしたウェルナーの反問に、彼女が本心から言っているので、あなたとならどこまでもついて行くと答えるのを聞いて、「たしかにか……手をかしておくれ、嬢ちゃん。さあ手を打とう。――十年たったら、おまえさん、将軍夫人か、未亡人か、だよ。」

かように副人物たちも結ばれて、喜劇はめでたく終幕となるが、さて終ってふりかえってみると、あの王の親書の強かった印象がたいそう薄れているのに気づく。上述のように劇が進展しているうちに、どこかへ行ってしまったような感じがする。いったいミンナ・フォン・バルンヘルムとテルハイム少佐とが結ばれるために、つまりドラマのめでたい解決のために、あの書簡は必要であったのか、という考えすら浮かんでくるのである。

指輪の小技巧や、ミンナが勝気で茶目っけな性質であることを考慮しても、やはりいささかやり過ぎと思える

あのトリック、これらはおそらくその頃のヨーロッパの喜劇に好んで使われた技法なのであろうが、そういうものはすっかり洗いおとして、主人公二人はどのようにして結ばれたのか、そのさい王の親書はどんな役割を演じたのか、という点を考えてみよう。

書簡の内容は三つの項目から成っている。㈠テルハイムから取りあげた県会の手形を返して、立替金を支払う。㈡戦時金庫のテルハイムの請求書にたいする中傷は却下する。㈢健康がゆるすなら再任官しよう。㈢はすでに見たようにテルハイム少佐にその気がなく、ミンナも望んでいないから、この点は度外視してよい。㈠と㈡はともに少佐にたいする「名誉回復」の処置で、これによってミンナの求愛にたいする彼の「かたくなさ」は氷解し、だから問題はもうなくなったはずである。しかるにミンナはまだそのお遊戯をやめない。ということは、彼女にとっては親書は何もすっかり解決しているわけではないのだ。いや、むしろ不満なのだ。だからあのような冷たい反応をみせたのである。そのことでしかしテルハイムが軍務へもどる意志のないこと、むしろ嫌っていることを確かめることができた。そして局面が根底から変ったような今も、彼が彼女とここを去って、ともどもに生きてゆこうという意志の変っていないことも確認された。だからあのように顔をあちこち振り向けて、かくそうとつとめるほどの感動をみせたのである。しかもまだあの演技をつづけて、テルハイムが遅くやってきたあの正義を受けるのは正直でないと感じると言って、王の書簡を破り捨てようとするところにまで追いつめる。つまり汚された名誉は親書によって回復されたけれど、あれほど思いつめたおのが名誉よりも、愛の方が、すなわちミンナの自分にたいする愛情と、彼女にたいする自分の愛情こそ何よりも大切だということ、そして、これこそ二人を結びつける「平等」であることをテルハイムははっきりさとることになるのだ。ところでその互いの愛情は、そ

れまでの起伏多い丁々発止で、言葉に出すのはてれくさいが、互いに確かめたところではなかったか。

テルハイムが自分の身の上の変化をミンナにすっかりうちあける第四幕の第六場で、七年戦争が終るとともに退役させられたことにたいして自分の考えを述べるところがある。

テルハイム　……王侯にとっては、平和の到来はわたしのような者の多くを不用にしました。そしてけっきょく王侯にとっては、無くてならぬような者は一人もいないのです。

ミンナ　あなたの話しぶりはまるで、あなたの方も王侯なぞ大いに不用だといわんばかりですわね。そして、今ほど王侯が不用なときはなかったのですね。

そしてけっきょくフリードリヒ王の親書も、二人のしあわせにとって unentbehrlich ではなかったようだ。親書は大王の「正義」を決定づける一実例であるように見えて、けっきょく無くてならぬものではなくなるというこの構成は、メーリングの指摘するより、もっときつい諷刺と嘲笑ではあるまいか。しかも実に上手に、さりげない顔をしている。

さきに一二頁で傍点をふった「冷やかに」というト書き、あのときテルハイムにそのようなそぶりと口調をとらせた作者の心に、ある無気味なものをさえわたくしはおぼえる。この語にも、またすぐあとの unanständig という形容詞にも、レッシングの専制政治体制にたいする抑えられてはいるが、それだけに深く強い怒りがこもっているように感ぜられるのである。そしてこの喜劇に、「フォン・テルハイム少佐」ではなく、「ミンナ・フォン・バルンヘルム」と題したレッシングの心意が分るように思われるのである。

（一九七三・三・十八）

註

(一) Die Lessing-Legende. In : Franz Mehring, Gesammelte Schriften. Band 9. Berlin 1963.

(二) 前掲書、四一頁—四一四頁

(三) Wilhelm Scherer, Geschichte der deutschen Literatur. Berlin 1899. S. 449.

(四) J. P. Eckermann, Gespräche mit Goethe. 26. Juli 1826 u. 27. März 1831.

(五) メーリンク、前掲書、一一八頁

(六) メーリンク、前掲書、一一八—一一八四頁

(七) Erich Schmidt, Lessing. Geschichte seines Lebens und seiner Schriften. Berlin 1899. S. 484.